

研究課題別中間評価結果

1. 研究課題名：コミュニケーション機能の発達における「身体性」の役割

2. 研究代表者名：中村 克樹（国立精神・神経センター神経研究所 部長）

3. 研究概要

本研究は、コミュニケーション機能を獲得するには、「身体性」（あるいは動作等）の役割が重要であるという仮説のもとに、言語も含めたコミュニケーション機能の発達・獲得過程における「身体性」の役割に焦点を当て研究することで、これまでにないコミュニケーション機能の獲得過程を解明することを目指している。これまでに自閉症児において模倣等の動作能力と発語能力が相関すること、動作模倣の訓練（応用行動分析）を用いた介入が、コミュニケーション機能の発達を促進することを示し、自他の認識の確立が発達を促進するという仮説の提唱に至っている。

4. 中間評価結果

4-1. 研究の進捗状況と今後の見込み

本研究は多面的なアプローチで統合的にコミュニケーション機能の解明を目指したもので、当初の計画は動作理解がコミュニケーション能力発達の重要な要素であるという考えにもとづいたものであったが、これまでに得られた成果によりコミュニケーション能力の初期発達には自己と他者の認識・区別が重要であるという新しい仮説の提唱に至っており、今後の進展が期待される。研究の進捗状況は霊長類研究施設の稼動に時間を要したため、サルの研究に遅れが見られるなど必ずしも順調とはいえない。今後は多方面に展開している研究テーマに優先順位を付け焦点を絞って研究を進めることが望まれる。

4-2. 研究成果の現状と今後の見込み

これまでに自閉症児において模倣等の動作能力と発語能力が相関すること、動作模倣の訓練（応用行動分析）を用いた介入が、コミュニケーション機能の発達を促進することなど優れた成果が得られており評価出来る。今後これらヒトを対象とした研究成果と現在研究代表者が進めている霊長類の研究結果が統合されれば興味深い成果が期待できる。

4-3. 今後の研究に向けて

これまでの成果を見ると、代表者と各共同研究グループは、それぞれ興味深い成果をあげているが、研究課題と直接関係のない研究もあり、代表者の目標達成へ向かって、全ての共同研究グループが十分な貢献をしているとはいえない。残りの研究期間での目標達成に向け、テーマに優先順位をつけ効率的に研究を進めることが必要と思われる。今後、霊長類に関する研究を一層進めるとともに、自閉症児の介入研究においては例数を増し、成果の高度化・緻密化が望まれる。

4-4. 戦略目標に向けての展望

自閉症児の介入研究、動作の模倣、動作意図の認知に焦点を絞った研究は、領域の主旨に合致しており現代社会における子供のコミュニケーション能力の発達やその障害などに関し、重要な意義ある成果が期待される。自閉症児の介入研究では例数を増やし条件統制をさらに工夫して、将来プロトコルガイドライン（案）の提

案を視野に入れた研究が期待される。

4-5. 総合的評価

自閉症の介入研究では優れた成果が見られている。また自己と他者の認識・区別の脳機構解明は社会性学習の視点からも重要で、今後の進展が期待される。一方、本研究チームは代表者と7名の共同研究者で構成されているが、これまでの成果で見ると、チーム全体としてのまとまりが不足しているように思われる。今後、代表者がリーダーシップを発揮して、共同研究体制をより緊密化して、初期の目標達成に向けさらなる研究の進展を期待する。